

輝石戦隊 キボンヌジャー

戦隊ヒロインは
サキュバスの甘い罠で調教される
完堕ち戦隊ヒロイン！
狂乱の戦闘員乱交編



観客の狂喜が爆発した。

「見ろよ！」「ケツから精液ぶちまけてるぞ！」「最高だああ！」

びくんっ♡ びくびくうっ♡

絶頂の余韻に震える身体のまま——。奏は、ふらりと四つん這いから崩れ、ゆっくりと腰を突き出した。

ぬちゅ……♡ くちゅっ♡

おもむろに、奏の手は……右手の指先は濡れきったマンコへ、左手はまだ精液が滴るアナルへ——。両方の穴を、同時に弄り始めた。

「あは♡ 奏……どうしちゃったの？ お尻の穴にまで指まで入れちゃって……」

「んはあぁっ♡ やあぁっ♡ 指……止まらないのお……♡」

奏は、サキュバスに助けを求めるように、涙目で訴えた——。

「はぁんっ……♡ 今度は……お尻の穴にも……男の精子が欲しくなっちゃったのおっ♡♡」

それは、サキュバスが奏のアナルの中へ精液を中出ししたせいであり——。奏のアナルは、完全に快楽を欲する“ケツマンコ”になっていたのだった。

くちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぬりゅりゅ♡

(やだぁ……っ♡ わたし……もう女じゃなくて……っ♡ お尻まで……欲しがるメスになってるぅっ♡)

ぐちゅっ♡ ぬりゅっ♡ ぬちゅっ♡ くちゅっ♡ …♡

膣口をかき回しながら、もう片方の指でアナルを“ぶにゅっ”と押し広げ——。
精液と愛液が混じった粘液が、と糸を引いて零れ落ちる。

とろおっ……♡ くちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぬりゅりゅ♡ …♡

サキュバスは、艶やかに笑みを浮かべながら、後ろから奏の尻を両手で鷲掴みにした。

「んふふ……♡ みんな見てえ～♪ 戦士だった子が……自分でマンコとケツマンコを同時に弄り回して……欲しがってるのよお♡」

ぐい、と尻肉を割り広げ——。観客の戦闘員と仲間の戦隊メンバーに、愛液と精液で汚れきった穴を晒しつけた。

観客席は、狂気のような歓声に揺れた。

「すげえ！」「ケツもマンコも自分でいじってる！」「牝穴二つとも欲しがってやがる！」

ぐちゅう♡ くちゅっ♡ ぬちゅう♡

「いやあ……っ♡　みないでえ……っ♡　でも……でもおっ♡　お尻……欲しくてたまらないのおおっ♡♡」

涙混じりに喘ぎながら——。奏はサキュバスへ視線を縫らせ、震える声で懇願した。

「今度は……グリーンの……精液を……アタシのアナルに……注入させてええっ♡♡」

「んふふ……♡　素直でいい子ねえ、奏ちゃん……♡」

サキュバスは妖艶な笑みを浮かべ、奏の顎を持ち上げると耳元で囁いた。

「それじゃあ……♡　一緒にイキましょうか……♡」

ずぷうううっ♡　ぐちゅうう♡

対面状態で、サキュバスの赤黒い肉棒が——。奏のマンコへ突き入れられた。

「ひああああっ♡♡　きもちいいっ♡♡」

抱きつく腕に力を込め、奏は必死にしがみつき——。腰を絡めて、“大好きホールド”をするように、脚をサキュバスの腰へ回した。

「はぁあん♡　感じる……！　奏ちゃんの子宮に注ぎ込まれたイエローの精液

……まだ熱くて……♡」

サキュバスは悦楽に震える声をあげ、蜜と精の混じる膣奥をねっとりと擦り上げていく。

そのまま、戦闘員の観客たちと仲間の視線を浴びながら——。サキュバスは抱きついた奏を支え、グリーンの前へと歩み寄っていった。

「さぁ……奏ちゃん♡ 望んだ通りにしてあげる……♡」

ぐちゅう♡ ぬちゅっ♡ ずぷりいっ♡

マンコにサキュバスの肉棒を受け入れたまま、突き出された奏の尻穴へ——。グリーン肉棒が挿入されていった。

「ひぎゃあああああっ♡♡ お尻いいっ♡♡ 入ってくるううううっ♡♡」

「どう？ 奏ちゃん♡ 二つの穴……同時に責められる悦び……♡」

「ひいっ♡ やっ♡ でもおおっ♡ 気持ちよすぎてええっ♡♡」

がくんっ♡ びくんっ♡ ぐちゅんっ♡ ぶちゅんっ♡

マンコとアナルを二本の肉棒に同時に突き上げられる度、奏の豊満な胸が上下に暴れ、涎と涙が垂れ流される。

（いやぁ……♡ でも……やめられない……♡ 二本同時なんて……もう雌と

して壊れちゃううっ♡♡)

がくんっ♡ びくんっ♡ ぐちゅんっ♡ ぱんっ♡

「サキュバスさまぁ……っ♡ わたし……っ♡」

奏は熱に濡れた瞳でサキュバスを見上げ、そのまま唇を重ねた。

ちゅぶっ♡ ちゅるるるっ♡ くちゅう♡

舌を絡め、唾液を食い合うような濃密なディープキス。

サキュバスの赤黒い舌が喉奥まで侵入し、奏は背筋を震わせながら、必死に舌を絡め返した。

「んんんっ♡ んちゅるるう♡ あああっ♡」

(甘い……♡ キスされるたび……もっと欲しくなっちゃう……♡)

その瞬間——。

ずぶんっ♡ ぱんっ♡ ずちゅっ♡ ぐちゅううっ♡

「ひやああああっ♡♡ ああああっ♡♡」

サキュバスは興奮に任せて腰を加速させ、奏のマンコを突き上げる動きをさらに激しくした。

それは同時に、グリーン肉棒も奏のお尻を責めさせるように、お尻を打ちつ

け——。二本の肉棒が同時に奥を抉り、膣とアナルの壁を内側から擦り合わせた。

「んふふふっ♡ どうお奏ちゃん……♡ 二本同時に突かれて……自分からキスまでしてえ……♡ もう完全に雌ね♡」

「ひああああんっ♡♡ だめえっ♡ でも……っ♡ 気持ちよすぎるのおおおっ♡♡」

ぐちゅうっ♡ ずちゅんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ …♡

「んぐううっ♡♡ ああああっ♡♡ だめえええっ♡♡」

絶え間ない突き上げに、奏の子宮が震え、腸の奥まで精液を欲するように収縮した。

ぐちゅっ♡ ずぶっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ …♡

「ひああああっ♡♡ だめえええっ♡♡ イクっ♡ イクうううっ♡♡」

奏は、ガクガクと腰を震わせ、涎と涙をだらしなく垂らしながら絶頂へと飲み込まれそうになった。

耳元でサキュバスが、甘く囁く——。

「んふふっ♡ 奏ちゃん……もう限界みたいねえ……♡

でも、ダメよ…♡ 私がイク直前まで、あなたも我慢しなきゃ、ダメなんだか

らあ〜♥」

「ひぐうっ♥♥ そ、そんなああ♥♥ いやああっ♥♥ イキたいのにいい
いっ♥♥」

その言葉は、まるで呪縛。

すでに、雌奴隷へと堕とされた奏の潜在意識に絡みつき——。絶頂寸前の快感を“我慢”へと縛りつけていく。

(やだ……っ♥ こんな……♥ イキたいのに……♥ ……っ♥♥)

ぐちゅんっ♥ ずぶんっ♥ ぱんっ♥ ぱんっ♥ …♥

膣の奥を抉られるたび、アナルの壁にぶつかるたび、快感が爆ぜる——。

だが、絶頂には届かない。

「んああっ♥♥ いやああ♥♥ イカせてええっ♥♥ もうっ……もう無理い
いっ♥♥」

しがみつく手は白くなるほど力を込め、豊満な胸は激しく乱れ揺れた——。

全身は絶頂を渴望しながら、サキュバスの「まだダメよ♥」という甘い声に縛られ、耐え続けるしかなかった。

「ふふふっ♥ いい顔してるわ、奏ちゃん……♥ イキたくてイキたくて……でも、我慢してるその表情……観客のみんなに、しっかり見せてあげなさい♥」

観客の戦闘員たちからは、狂喜が轟いた。

「見ろよ！」「イキたくて必死に我慢してやがる！」「最高だあっ！」

ぐちゅっ♡ ずぷっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ …♡

膣奥と腸壁を二本の肉棒が同時に擦り上げ、奏の全身を容赦なく突き上げた。

「ひあああっ♡♡ もお……っ♡♡ イキたいのにいつ♡♡ イカせてええっ♡♡」

涙と涎をだらしなく垂らし、腰を突き出していく——。

だが——。サキュバスは、なおも甘く囁き、呪縛の言葉を重ねる。

「んふふ……♡ まだダメえ♡ 奏ちゃん、もっと……もっと惨めに欲しがりなさい♡」

「んぐうっ♡♡ ああああ♡♡ だめええっ♡♡ イキたいいつ♡♡ おねがいつ♡♡」

奏は、その衝動から——。抱きつく豊満な胸を、サキュバスの乳房にこすり合わせた。

観客の狂声が轟き、視線は全て“イキたがり雌”の姿に注がれた。

【体験版おわり】